

# 岩野泡鳴論

野口 明子

## 序論

岩野泡鳴は明治四十二年二月「耽溺」を発表し、小説家としての地位を築いた。しかし、その年の六月、彼は無謀とも言える樺太の蟹の罐詰事業に乗り出し、事業家として、文学者として新たな挑戦を試みる。今日『泡鳴五部作叢書』と言われる作品は、その時の北海道放浪中の経験をもとに書かれたものである。

五部作の主人公・田村義雄は「刹那主義の實行哲學家」と紹介され、義雄の目から見た一元的描写で泡鳴は描かれている。主人公の主観のみで語られるため自己中心的な小説となり、また、この五部作のお鳥のモデルとなった増田しも江や、その後の遠藤清子らとの女性関係が人々の批判をかってきたこともあり、泡鳴文学は理解されにくいものがあった。

しかし、田村義雄が自己の「生の哲学」を確信し、特異

なまでにその哲学に執着する姿には、圧倒されるほどの生命力と、一貫した考えの力強さを感じずにはいられない。また、登場人物が、それぞれの生きる道を信じて突き進んでいこうとする様は、なんとも勇ましく、自分に正直な彼等に一種の爽やかさを感じるのである。そんな登場人物の奇抜な個性が、泡鳴文学独特の世界を作り出している。

私は五部作の主人公・田村義雄を通して、作者泡鳴自身の思想や五部作に対する思いを見ていくと共に、泡鳴文学の魅力について探っていきたいと思う。

## 第一章 泡鳴の生い立ち（省略）

## 第二章 泡鳴五部作について（省略）

### 第三章 義雄の特異性

#### 一 「新しい發展」に対する義雄の異常なまでの熱意

田村義雄は、実行利那主義の哲理を主張し、段々文学界に名を知られてきた、ある商業学校の英語教師である。麻布の我善坊にある田村という下宿屋は、主人が病死したため、息子の義雄が後を継ぐことになったが、妻と継母とに任せる。彼はヒステリーの妻千代子と継母、妻に支配された三人の子供（四人目の子は、里子に出ている。「發展」後半で死亡）を煩わく感じ、「自分の妻子は書物と原稿」と主張する。そんな彼が、父の死を機に「自分自身の新しい發展ができる」と考えるのである。義雄の思う「新しい發展」とは、一体何なのか。今後の義雄の行動を見ていくことにする。

まず、義雄は既に「女優の養成」を二人手掛けて失敗していた。その後「發展」において就職のため紀州から上京してきた清水お鳥を愛人にしてしまう。しかし、義雄が前から患っていた性病がお鳥に移ってからは、義雄の理想とした二人の愛ある生活は早くも崩れるのであった。そして義雄は、再び「新しい發展」への欲望が湧いてくるのである。

それが『樺太の蟹の罐詰事業』である。父が生きている

頃、資本を頼んで危険だと断られていた計画であった。しかし彼は「新しい發展」はこれしかない、とばかりに即決に決めてしまう。その後「毒薬を飲む女」において、大した準備もなく、お鳥との関係で紛糾する家庭の中で、父から受け継いだ下宿屋を抵当にした金を資金に、義雄は事業へと乗り出し、樺太へ渡るのである。

そこまで義雄を無謀な計画に飛び込ませた動機は、一体何だったのか。そして、その異常ともいえる熱意はどこから湧き出しているのか。義雄の言動を通して、作者泡鳴が樺太の事業に求めたものを探っていきたい。

第一に、自己の社会的立場の確立を切望していたことが挙げられる。

ある晩義雄が、お鳥の住む二階建長屋の大工夫婦に戸を開けるよう叩くが、無視されてしまう。その時、

あんな劣等な人間にまで馬鹿にされて、自分の社會に於ける立ち場は全く零になつたのではないか？

一般社會には精神的なことは分らない。

(中略)

文藝のやうな無形的な事業では、どうも満足出来ない氣がする。

何をしたって、自己の發展なら、おのれの主義と主張

とは通る筈だ——早く一つ書割などよりもずっと有形的な事業をして、名譽と金銭とを自分の内容的實力と共に兩得して見たい。(「發展」十七)

と、思うのであった。このような自己中心的な考え方は、泡鳴文学の特徴である。

「劣等」とは、文学といった「無形的な事業」の価値が分らない者という意味で、大工夫婦を通して「一般社會」全体に対して吐いた言葉だ。義雄には確信している自己の「内容的」充実があった。しかし「無形的な事業」では、その精神的な充実までも現実の中で無力化し、自己の社会的立場が確立できないと考える。そのため、名譽や金銭のように社会的価値が伴う「有形的な事業」へ魅かれていたのである。

ここで、作者泡鳴のことを語ると、彼が樺太へ出発したのは、明治四三年六月頃であり、その寸前彼は自分の体験をもとに書いた「耽溺」<sup>(註2)</sup>で、詩人から小説家としての地位を得はしたが、原稿生活への不満は絶えず生活は貧しいものだった。泡鳴の収入は文名のおかげできた大正三年でも、一年間で千五百円余りであった。泡鳴が事業の成功によって、経済的生活苦の打開を目指していたことは明らかである。

義雄の社会的立場に対する不安は、共に「無形的な事業」をする文學界においても同様であった。義雄は、自分の属している龍士会の人々から、「いやな皮肉や冷笑などを當てつけられるのが、この頃、非常に氣になって來た」(「發展」十七)と、よそよそしさを感じている。詩界から小説界へ移って以降、新しい立場を社会的に樹立することもできず、作家としての勢いがなくなってきたことなど、彼自身も氣付いていたことであった。

同じく泡鳴自身も、原稿料や文學仲間や関係者からの批評に対する不満を感じながらも、現実には私小説的な体験を「耽溺」事件ほどしか持たずに、小説生活での行き詰まりを感じていたのではないか。題材の貧困を隠すために泡鳴は樺太に向かったとも考えられる。泡鳴が、まわりの文學者に対し、自分の立場の不安定さを氣にしていたことが、次の義雄の言葉にも見て取れるのである。

『さうだ。どうしても、わが國の極北へいかねばならない——でないと、あいつ、意志が弱いのだ、爲るくと吹聴ばかりして、何も着手しない、と、いふ友人間のそしりを脱することが出来ない。』(「發展」二十二)

泡鳴にとって『樺太の蟹の罐詰事業』は、経済的生活苦の打開という目的であったと同時に、文學者としての新たな前進をするための手段であり、これをもって社会的立場

の樹立に臨んだのであろう。

第二に、生の充実を求め、まわりの「死」から逃避するための手段であったことが挙げられる。

義雄にとつて厳格な父の存在は偉大であり、恐るべき権威者であった。その父が死に、彼を引き止める権威がなくなつた。つまり今後の活動や資金面でも、彼の好きなように出来る自由を手に入れたのである。しかし父の死を機に、義雄は父をどこかで精神的な抛り所となる権威として求めていた自分に気付く。彼は権威に対する生きがいを失うことになる。一見矛盾しているようだが、この複雑な義雄の生き甲斐のなさ、寂しさもまた、樺太での事業の着手へと導いているのである。

次に子の死であるが、里子に出していた第四子が火葬場へと送られる車を見送りながら義雄は「死にいくものは、自分に關係がない——(中略)千代子も死ね、お鳥も死ね、入院してある二名の子も死ね、さうしたら、基も冷たい雪や氷の中へでも、自由自在に自分の事業をしに行ける」(「發展」二十二)と思う。

自分の子供も、前後三人まで死んだ。女房も自分には死んで、もう、形骸ばかりだ。お鳥なるものも、その本

體の半分か、四半分しきゃ生きてない。

『自分を去るものはすべて形骸だ、否、死だ!』

(中略)

今や義雄には樺太の事業に全身全力を注ぐのがそのいちである。早く、もツと金が欲しい!同時に、また、よく自分を理解して呉れる女が欲しい!

(「毒薬を飲む女」<sup>註(3)</sup>四)

このように義雄は、まわりの「死」を無関係なもの、まだ生きている妻子やお鳥をも自分にとつては「形骸」ばかりであると自分から突き放し「生」にのみ執着する。そして自分の生きる道を痛切に求め、彼らから離れて樺太へと向かうのであった。

ここまで、「生」に執着する理由は、義雄が「利那主義の實行哲學家」として存在したから、と考えることができる。

つまり、泡鳴が五部作の前者『神秘的半獸主義』<sup>註(4)</sup>のなかで説いた思想の実現者として、この主人公が描かれていることを意味している。泡鳴は、我々の立場は一利那にあり、その利那を空しく逃がさぬようにするしかない。その利那の自分を食うことに生命を求める我々は、悲痛なる利那的存在である、と述べている。つまり、利那利那の充実が、

自己の生命をつないでくれるわけである。

義雄の利那的燃焼を、死後の父や第四子が引き起こすことは不可能であり、妻やお鳥に対しては、義雄自身望みをなくしている。生の瞬間的充実の媒体としての意味を持たなくなった人達を、義雄は「死」と考え平気で捨て去ってしまう。義雄はまわりの「死」から逃避し「生」の充実を得るための手段として、樺太行きを強行したのである。

「發展」「毒薬を飲む女」と、義雄が何度と無く繰り返した「新しい發展」への狂気なまでの熱い思いを見てきた。特に『樺太の蟹の罐詰事業』の動機を、まわりの者・環境のせいにしてしまうほど自己中心的で人間味のない考え方は、泡鳴文学の際立った特異性である。

ここまで樺太への熱意を見せた義雄であるが、彼が事業の成功や失敗に対してあまり頓着していないことに注目したい。樺太の事業が危険な賭であることに彼自身気付いていたことは文脈から容易に読み取れる。また、いわば義雄の夢であった樺太の事業についての描写があまりに素っ気ないものに止まっていることも、事業の成功を目的としていないから、と考えることができなだろうか。

つまり樺太の事業は、社会的地位を確立するためだけでなく、文学者生活としての行き詰まりや、家庭やお鳥、彼

のまわりを囲む「死」から抜け出すためだからこそ強行されたのである。目的から、失敗を償うため逃避のための手段へと、その意味が変わっているのである。

同じく泡鳴にとっても、樺太事業は金銭的理由の他に、小説家としての想像力の貧困の解消、家庭からの脱走、「生」の充実を求めた結果であった。樺太での事業の成功が目的ではなく、樺太に行くこと自体が目的であったのだ。異常なまでに訴える義雄の樺太への熱意から、泡鳴の樺太行きに求めたものが分かってくるのである。

## 二 妻子・女性に対する冷酷な態度

泡鳴は、義雄の愛する女性の描写でさえも、美しさ、ロマンチックなものとは全く描かれず、あつ気なく片付けられている。中でも義雄の妻子に対する憎悪の念や、お鳥との無情な縁切りは、読者をゾッとさせるほどに冷淡な目を通して書かれており、人間味を感じさせない。この義雄の冷酷な態度から、泡鳴の特異な女性観とその意味を探ってみたい。

まず「五部作」を通して義雄の態度が冷酷であった妻千代子について見てみよう。

『こんな家や妻子は、自分にそぐはなければ、棄てゝもいいんだ。』

『棄てられるなら』と、妻は少し身をさすつて、『棄てゝ御覽なさい!』

『ふん、棄てるとも——もう、おれは精神的には棄てゝいるんだ』

『何とでもお云ひなさい——人を表面上の妻だなんて。』

『お前の命令などア受けないと云つていられるだらう——おれの心に反感をいだかせるものは

皆おれの愛を遠ざかつて行くのだ。愛のないところから、おれの家もない。』

#### (「發展」一)

義雄は、家を守り、子を育てることのみに力を注ぎ、くすんで所帯じみた妻に再び愛情を示すことはなかった。そのため、愛すべき他の女性を求めて止まない義雄と妻の間には諍いがたえなかった。

義雄は三人の子供に対して、「これがすべて自分等の間に出来た子かと思ふと、可愛いと云ふよりも、寧ろうるさい物だと云ふ氣が先に立」(「發展」二)ち、冷たい態度を見せている。義雄は子供達を通して、妻千代子と思わずにはいられない。妻が彼の愛を受ける価値が無いのと同

様に、妻の配下に置かれた子供達も、彼の愛を受ける対象にはなり得ないのであると彼は主張する。〈親子愛〉を真つ向から拒否し、非常に割り切った考え方は人間味を感じさせない。

これ程までに義雄が家族に冷淡な態度をとれる理由の一つに、利那主義の哲理がある。

戀愛は萬物と共に利那的の表現であるから、(略)一たび冷えた愛情が再び熱して來る時はあらうが、もう、先の愛情とは一つではないのである。僕らは永續的結婚の成立を確立することが出来ない。一夫一婦とは、その瞬間に於いてのみ眞理である。

#### (「神秘的半獸主義」(十七) 戀愛)

先の「發展」一の引用中の「愛のないところにやア、おれの家もない」という言葉も、この考えから出てきたものであり、千代子は既に「精神的には棄てゝる」「表面上の妻」であった。義雄は利那主義の実行哲學家であるがゆえ、妻子に対して冷淡な態度を平氣でとれるのである。

第二にお鳥に対する義雄の態度を見ていくことにしよう。愛人お鳥は、義雄の父の死後、妻に絶望した彼の「新し

「い發展」であった。

戀は丁度闇の中に一つの光が現はれた様なもので、それが僕等の表象であると思へば、消えないうちに僕等は直ちに之を吸い取ろうとする。

〔神秘的半獣主義〕（十七）戀愛

お鳥は義雄にとって、一刹那に現れた光である。義雄が執着するのは、現実のお鳥自身ではなく、お鳥によって持ち得ることのできた、若く充足した精神であった。そのためお鳥に対する義雄の気持ちは、理想と現実の間で絶えず揺れ動くのであった。

結局お鳥も「新しい發展」から遠ざかり、義雄を心から愛し、理解する女性ではないことを彼自身認めざると得なくなつてしまつた。

第三に、薄野遊廓「井桁楼」の遊女、敷島との一時の關係を見てみよう。

義雄は北海道で放浪生活をする中で、敷島となじみ、彼女の生き方に共鳴する。重ねがさねの事業の不成功に義雄の活気ある場所は遊廓だけになつてくる。しかし、「お客」と「女郎」の關係では、敷島は義雄の満足できる相手ではなかつた。

自分が愛した女が自分の愛に十分に信じられなくなつた以上は、早くそれと自分のいわゆる「死に別れ」をして、自己その物の中にできた分泌物——愛がなくなつた女は分泌物だ——を排泄しよう。それが自己の強烈生活を保つゆえんである、と。

〔斷橋〕<sup>註(5)</sup>十六

義雄が冷酷な態度をとる裏には、自己の哲理を主張する彼の姿がある。彼は、まさしく作者泡鳴の唱える哲理の実行者であり、つまり義雄の女性への態度は、泡鳴自身の女性観が導いていると言つてもいい。

泡鳴は明治四一年、増田しも江を困い、翌年樺太に向かう。冬に帰京すると直ぐ、しも江とも別れ、妻とも別居して、遠藤清子と同棲を始め、世間の批判をあびた。泡鳴は文章を通して、度々の女性問題への批判に反論しようとしたのではないか。言い換えれば、自己の哲理を信じ、実行しているだけののだと主張したのではないか。

泡鳴は、生の充実を女性を求め、刹那刹那を生き抜く義雄の姿を描いた。しかし、義雄の女性への冷酷な言葉や、自己の信念を繰り返して述べているのも、読者からすればくどいほどで、作者の心の余裕のなさを感じる。それらは、信念を徹底させるためのポーズとも見てとれるのである。

泡鳴文学における妻子・女性への特異なまでの冷酷な態度を見ていくと、泡鳴自身の女性を求めて止まない利那主義的心境を、自己の哲理をもって世間に解き、自らの正当性を主張しようとした泡鳴の姿が見えてくるのである。

### 三 自己の哲理に対する執着心

明治三十九年六月、左久良書房より出版された『神秘的半獣主義』の内容を、簡単に説明しておきたい。この書のかなで泡鳴は「僕等は實に悲痛の肉なる靈である」と言い、存在は流轉であり、運命は目的もなしに人間を弄ぶから、我々はその苦痛に堪える外なく、苦痛の瞬間に堪えるとき、利那的存在である生命の眞価が発揮される。脱却することのできない悲觀を食って、これに堪え、これを生命とする「自食自養」の人間觀が、半獣主義であり、それを写実するのが文芸である。と言っている。

この哲理を踏まえて、義雄の放浪生活を見ていくことにする。

義雄は樺太の事業に失敗し、札幌に戻ってくる。友人、有馬勇の家に世話になりながら、事業に自己の再起をかけて数々の計画を立てるが次々と崩れ、不如意な放浪生活が続く、その困苦は義雄の活動生命を蝕んでゆく。窮地に追

い込まれた義雄の生命の糧は薄野遊廓の遊女・敷島のみとなり、悲痛な毎日を感じずにはいられない。それはまさしく、かれの主張する「自食自養」の生命であった。つまり放浪は、結果として自己の思想を実生活で検証する「実践の場」になったのである。しかしながら、「断橋の行き悩み」となった義雄は、疲労と衰弱で、自分の主義である悲痛なる自己を食うことも、その主張も、全く力のないものになってしまった。

自分は、もう、肉と靈とが分離して、生々生活のもととなる肉の幻影力を失い、靈ばかりが瘦せッこけた無生氣の亡者の如く、自分の運命を踏み越えるのではないか知らん？それなら、自分の主義の破滅だと。

〔憑き物〕六<sup>註6</sup>一

實際、自分は自分の主義を持ちなやんでゐる。主義さへ棄てたら、死んでもいいのだ。いや、無主義は實際に於いて死だ。

〔憑き物〕七

ついに彼は、札幌に押し掛けて来たお鳥と共に、豊平川の鉄橋から投身自殺を図る。この時点で義雄は、放浪による悲痛な生活に敗北したことになるだろう。



さて、この心中にあっ気なく失敗した二人は、「死」から「生」への変換を気まずく感じながら下宿に帰る。しかし義雄の「死」から「生」への変換は、机の上の論文「悲痛の哲理」<sup>(註7)</sup>の原稿であった。

「少なくとも、この論文を書きあげる間は、死ぬべきものではない」といふ考へが浮ぶ、悲痛の哲理は乃ち生の哲學である。生の哲學を體現するものは、飽くまで、死を排斥する意志と努力とを持つてゐなければならぬ。渠はかう考えて、再び自分というものを引き立てることが出来た。「この半月ばかりは」と、彼は心に語つた、「實に、自我を最も多く逸してゐた。實質上の自殺をしてゐた。自分自身も亦あの様な斷橋であつた。」

〔憑き物〕九

つまり、自己の思想に対するこのところの裏切りが義雄にとつての「死」であり、「自分の悲痛な思索は自分の直接経験だ。」（『放浪』十七）<sup>(註8)</sup>と確信しながら着手し始めた「悲痛の哲理」こそ、現在の義雄の姿であるのだ。すなわち、義雄は義雄の哲理そのものとなるのである。義雄はこの「生の哲學」である論文を書きあげることに、自らの「生」を取り戻すのであつた。その夜、彼は「悲痛の哲理」

の大半を書き上げ、「お鳥の様なものの爲めにおほかた心中までしかけたのは、優强者としての努力にゆるみがあつたばかりの間違ひ」だつたと、いつもの自己中心的な義雄に返る。

義雄はその後、「矢ッ張り、文學と云ふ藝術を一生の仕事にしよう。早く東京へ、早く東京へ！」「失敗したのはおれに取つておれその物の事業の第一歩であつた。その第二歩は實際にこれからだ」（『憑き物』十八）と思う。第一歩とは、放浪で実践した、自己の哲理の確信であり、第二歩は、ふつふつと湧き上がる文學への新たな希望であつた。そして、新しい人生に無関係なお鳥に縁切りを告げ、憑き物が落ちた気分となる。これで「五部作」が完結する。義雄は自己の哲理に救われたのである。北海道からの帰京後、事業の失敗者、世間知らずの文學者といつた世間の嘲笑を買うことを、非常に悔しく思つていた義雄が、一転して文學への希望を胸に東京へ帰る。もう北海道の事は、お鳥と共にすっかり過去に追いやつて、顧みない。東京での新しい幕開けの引き金となつた放浪生活は正當化され、義雄は「利那主義の實行哲學家」としての立場を崩さずにいられたのだ。

泡鳴は、放浪中の義雄にいつも哲理を負わせていた。樺

太の事業やその他の事業への欲求から、女性との関係、放浪生活の困苦、自殺、そして文学への再出発にいたるまで。義雄を「利那主義の實行哲學家」として生かし続けたその訳は、先述のように、義雄を敗北者にしてしまわないことであつたのだ。

それはつまり、泡鳴自信が敗北者でないことを主張するためであつた。彼自身、樺太の事業に失敗し、放浪の後帰京した。無謀な事業というまわりからの反対を押し切つて乗り出しただけに、多少惨めな思いを感じていたのではないか。彼は樺太での事業は、自分にとって決して無駄ではなかつたことを、文章をもつて示したかつてのであろう。

また、『憑き物』の最後の場面で、東京に戻る義雄が文學者としての再起に強い意志を見せている。これは、作者泡鳴が意識的に書き上げたのではないかと考える。特に『泡鳴五部作叢書』第四篇『憑き物』において、十五から最後まででの「憑き物」は大正七年五月発表のものであり、泡鳴が実際に帰郷した明治四二年十一月から約九年の開きがあるのだ。この蛇足ともいえる「憑き物」での義雄は、後に文學者として再起した泡鳴から見ると、当時の泡鳴自身姿であつたかもしれない。

## 結論

五部作の内容は、多く泡鳴自身のまわりで起こつた出来事であり、「利那主義」もまた、泡鳴自身が説いた思想である。しかし、義雄は泡鳴というわけでもない。五部作は、あくまで田村義雄という利那主義の實行哲學家の実生活である。哲學家であるがゆえにこれほどの特異な論を展開していったのだ。人間味を感じさせないのは、泡鳴が自分の行動から、利那主義の實行哲學家だけを取りだし、再び造り上げているからなのだ。そう考えるとき、義雄の特異な行動や発言などが、泡鳴の作品への態度に結び付いていることが分かる。

泡鳴は帰京後『放浪』を出版し、次に続篇の「斷橋」を發表した。しかし評判は余り良くなかつたらしい。次に「發展」、「毒薬を飲む女」を發表し、樺太への熱意を強調することで、先に出した『放浪』の、義雄の放浪が意味あるものであつたことを言いたかつたと考える。だから、事業の成功が目的ではなく、行くこと自体が目的であることの特異なまでに訴えているのである。

『憑き物』は、後に五部作に入れられた作品であり、三で述べたように最後の部分は、まとめの意味を含めて付け

加え、文学者としての再出発の意気込みを世間に見せた。

泡鳴は、家庭生活と原稿生活で成功しなかった。「生」の充実を求めて乗り出した樺太の事業も失敗した。その後の女性問題も世間の非難を浴びた。彼の行動の結果は、実生活においてはいつも敗北であった。彼に許されるのはただ表現の世界で、この敗北を覆すことであった。泡鳴は五部作において、自己の再構築を図っているのである。だからこそ、敗北と知りながらも認めることはしない、自己の優位を確信しきった頑固な信念をもつ主人公が出来上がったのだ。

五部作中の人物は、実際は躊躇して出来ないようなことを、確固たる信念のもと何のためらいもなく実行していく。私はその一本気な姿勢を羨ましく思い、勇ましい泡鳴文学に魅力を感じた。強引な話の展開は、まるで意志を持つ人間のように一人歩きを始めて、私など取り残された思いがした。自分と素直に向き合い、自分として生きていく道を追求する人間を描写する泡鳴の作品には、一貫した強い意志と生気に溢れており、それが文学自体に生命を与えているのである。そこに、私は文学の面白さを改めて感じたのである。

註(1) 『大阪新報』(明治四四・一二一四五・三) 引用

およびテキストは、明治文学全集 『岩野泡鳴集』筑摩書房刊(昭和四十・三)に依る。

註(2) 『新小説』(明治四二・二)

テキスト：現代日本文学全集 『岩野泡鳴集』改造社刊(昭和五・四)

註(3) 『中央口論』(大正・六)

原題「未練」。初出のみ田村義雄が吉野貞夫、千代子が寿美子、清水お鳥が清田お鳥となっている。

引用およびテキスト：日本近代文学体系 『岩野

泡鳴・近松秋江・正宗白鳥集』角川書店刊(昭和四九・一)

註(4) 左久良書房刊(明治三九・六)

註(5) 前篇『毎日電報』(明治四四・一二二)、後篇

『東京日日新聞』(明治四四・三)

引用およびテキスト：日本文学全集 『岩野泡鳴集』集英社刊(昭和四九・十一)

註(6) 「寝雪」、「続篇寝雪」、「後篇寝雪」——『新小説』

(明治四五・五二七)

「川本氏」——『趣味』(明治四三・一) 「憑き物」

——『新潮』(大正七・五)

これらを集め補訂

引用およびテキスト：現代日本文学全集 『岩野

泡鳴・近松秋江集』筑摩書房刊（昭和二九・十）

註（7）『文章世界』（明治四三・一）

註（8）東雲堂刊（明治四三・七）

引用およびテキスト：明治文学全集 『岩野泡鳴集』筑摩書房刊（昭和四〇・三）

### 参考文献

明治文学全集 『岩野泡鳴集』筑摩書房刊（昭和四〇・三）

日本文学全集 『岩野泡鳴』集英社刊（昭和四九・十一）

日本近代文学体系 『岩野泡鳴・近松秋江・正宗白鳥集』

角川書店刊（昭和四九・一）

現代日本文学全集 『岩野泡鳴集』改造社刊（昭和五・四）

現代日本文学全集 『岩野泡鳴・近松秋江集』筑摩書房刊

（昭和二九・十）

現代日本文学体系 『岩野泡鳴・真山青果・上司小剣・近

松秋江集』筑摩書房刊（昭和四五・五）

現代文学体系5 『徳富蘆花・木下尚江・岩野泡鳴集』筑

摩書房刊（昭和四一・四）

近代日本キリスト教文学全集 『岩野泡鳴・山村暮鳥』教

文館刊（昭和五一・五）

『耽溺』（岩野泡鳴著）日本近代文学館刊（昭和四三・九）

『新自然主義』（岩野泡鳴著）日本図書センター刊（平

成一・十）

『岩野泡鳴論』（伴悦著）双文社出版刊（昭和五二・十二）

『岩野泡鳴』（大久保典夫著）南北社刊（昭和三八・十二）

『岩野泡鳴研究』（鎌倉芳信著）有精社刊（平成四・六）

『近代日本文学論』（川副国基著）早稲田大学出版部刊

（昭和三四・十二）

特集・遙かなる明治 文学史の新視角 泡鳴文学の位置

（伴悦著）『解釈と鑑賞』（昭和五五・十二）

『神秘的半獣主義』私注——岩野泡鳴の「自然」——（相

馬庸郎著）『文学』（昭和五五・一）

毒薬を飲む女のお鳥（大久保岩野泡鳴——

泡鳴は性欲上の病人か——（大久保典夫著）

『国文学』（昭和五八・七）

耽溺——岩野泡鳴（伴悦著）『解釈と鑑賞』

（昭和六二・十）